

平成29年11月15日 発行

No. 14

公益社団法人 日本山岳会 山形支部
〒997-0034 鶴岡市本町2-6-9

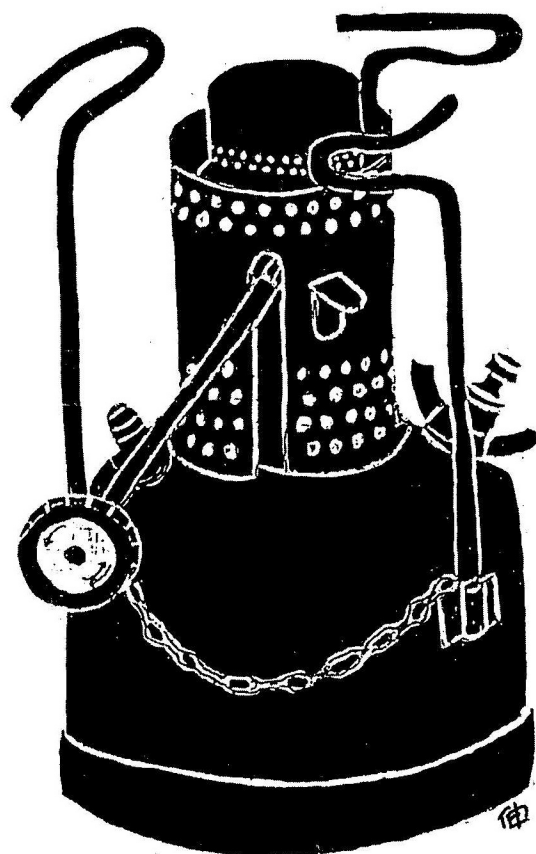
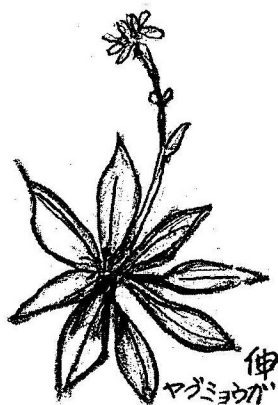
佐藤 一広 方
TEL/FAX 0235-22-4079

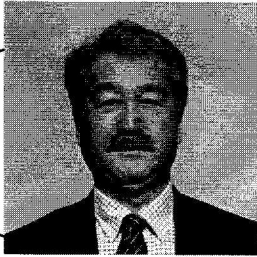
目 次

飯豊山特集号

- ◇ 支部長就任挨拶 野堀 嘉裕 P 1
- ◇ 蔵王「樹氷原を滑る会」に参加して
(元会員) 大島美恵子 P 2
- ◇ 飯豊山紀行 (故人) 石井 貞吉 P 3～8
- ◇ 飯豊山有情 木村喜代志 P 9～12
- ◇ 一人山旅の記憶 今野 秀穂 P 15～17
- ◇ 下山家 (カンジキ・トレッキング)
會田 茂雄 P 18～19
- ◇ 鳥海山スキー登山 粕谷 俊矩 P 20
- ◇ 2017年度 J A C 山形支部会員活動記録
事務局 P 21～22

写真 菅原富喜・梅津誠一
挿画・カット 長岡伸恭





支部長就任にあたっての挨拶

山形支部長 野 堀 嘉 裕

2017年4月8日に開催された日本山岳会山形支部総会で新任の支部長を拝命しました野堀嘉裕と申します。歳はとっているもののほとんど新人ともいえる当方が支部長に任命されたのは、出席された支部会員の皆様が、名前の「ノボリ」の音が「登り」と感じ、異和感を持たなかったことにあらと感じています。

私は前田直己会員に推薦をお願いして会員になりました。決してトップクライマーではありませんが山歩きは大好きです。山岳小説を読んだり山岳写真を見たりすることも大好きです。木村前支部長から重責を引き継ぎ、事態の大変さに困惑している毎日です。

私は1951年東京都葛飾区、「フーテンの寅さん」でおなじみの柴又帝釈天のそばで生まれました。山とか森が近くに全く無いところで、光科学スモッグが毎日発生していた時代に育ったので、興味を持ったのは自然環境の変化でした。

登山は都立両国高校在学中に同級生と丹沢に行ったのが始まりです。その後、日本大学、山形大学、北海道大学で森林科学を専攻したため、趣味の登山の他、調査研究のために国内外で山行を行ってきました。北海道大学の大学院時代には2月に森林調査を行うため、シールのついたストーというスキーで森の中を歩き回る経験をしました。

職業は王子製紙材木育種研究所研究員、東北大学を経て山形大学で教育研究に携わってきました。教育研究分野は森林情報学、森林資源計画学です。2017年4月から山形大学の名誉教授となりました。研究分野である森林科学に関する著書、論文は多数あります。

主な山行経歴は1968年八幡平、1969年奥穂高、1970年北アルプス白馬岳～唐沢岳縦走、1971年屋久島宮之浦岳、1972年冬八ヶ岳横岳、1973年北アルプス針ノ木岳、1974年北アルプス立山、1975年南アルプス北岳、1977年北米大陸国立公園視察、1991年カナダ北極圏アクセルハイベルグ島他化石林調査、1992年ヨーロッパアルプス・ブライトホルン、2009年からモンゴル国フブスグル県で森林バイオマス調査を行ってきました。1980年代以降は毎年、蔵王、月山、朝日、鳥海山など山形県内の山に登っています。

2006年から退職まで山形大学の学生サークル「自然に親しむ会」の顧問を務めましたが、若い人たちの登山への考え方が昔と違ってきていると感じます。第四次登山ブームが再来しているといわれる反面、山岳会への加入が進んでいないのは、この点を理解していない山岳会の体制にも問題があるように思われます。

山形支部のメンバーも高齢化が進み、新会員の確保は至上命題です。会員確保が支部長の大きな課題といえるでしょう。支部会の発展に向けて皆様のご協力を切にお願い申し上げます。

蔵王「樹氷原を滑る会」に参加して

大 島 美恵子

平成24年度山形支部恒例の蔵王「樹氷原を滑る会」は、1月21～22日昨年まで利用してきた蔵王国際ホテル閉鎖解体を受けて、中森ゲレンデ近くの「ル・ベール蔵王」で催された。アルパインスキークラブの松坂良一、早川英夫両氏に、越後支部会員で山形支部の会友でもある田邊信行氏も加えて11名が参集した。

土曜日の夕食時までに集合して、夜はお酒に話が弾み、翌朝9時にホテルの車で蔵王山麓駅まで運んでもらい、地蔵岳頂上にケーブルで登頂した。下界はガスの中であつたのに、頂上からは朝日連峰も月山も望めて幸せであつた。地蔵尊にお参りしてから、それぞれ楽しく滑って黒姫小屋で昼食後解散した。前日の滑りのせいで疲れていた私は、80歳を過ぎた高齢のベテラン山男のお二人の元気に驚きながら、皆に大変な迷惑をかけながらの下山であつた。

山もスキーも落ちこぼれの私でも、大学生になった春休み（1958年、昭和33年）に「蔵王越え」をした思い出がある。当時の古いメモを繰ってみると、3月29日、晴れの日を選んで決行した蔵王越えは、樹氷の小屋朝7:55出発、地蔵のコル着9:25、熊野神社を過ぎた10:50頃から猛吹雪となつて、必死の思いで12時頃に避難小屋（今は無い）にたどり着いた。1時間休憩後、避難小屋から刈田岳下の小屋を通り、峨々温泉着16:15とある。

地蔵山頂までのケーブルはまだ無く、樹氷の小屋からザンゲ坂をスキーを担いでラッセルしながら登った記憶がある。当時はスキー人口が増加し始めており、樹氷の小屋が建設された年ではなかったかと思う。避難小屋で驚いたのは、すでに一人の先客があつて焚火にあたらせてもらったこと、その方が避難小屋の戸を開けて、吹雪に向かって何人かの名前を叫んでおられたことであつた。冬の蔵王で亡くなった方々の名前であつたのだろうが、山の恐ろしさを実感した。また、たどり着いた当時の峨々温泉のひなびた宿は男女混浴で、これも驚いたことを鮮明に覚えている。

現在の蔵王は、ケーブルもリフトもよく整備されて、たくさんのゲレンデが広範囲に広がっている。最近はスキー人口が減り寂れてきたという嘆きも耳にする。しかし、賑やかな蔵王の時代を知らず、50年の空白を経てスキーを再開した私にとっては人が少なくてもよく整備された蔵王の現在のゲレンデは最高である。もっと蔵王の素晴らしさが楽しめるように、足を鍛えたいと思っている。



飯豊山紀行（昭和三十三年七月二十日～二十四日）

石井 貞吉

昭和三十三年七月二十日、私が十数年前から登りたいと心掛けた紀行文や地図等で懂れて居た飯豊山登攀が實行せらるゝ日が恵まれて年来の宿望が達せられる事になった。十八日の夜、同行者五人（佐藤君欠席）持参品、コース等の打ち合せを行い鶴岡驛午前五時五十分上り列車で出立する事に決めた。

七月二十日 森君に寄り、阿部君により佐藤君と連れになり折よく全員車上の人となった。新津で乗替へ、磐越西線徳沢駅で下車、二時近く折良くも極入製材所のトラックに便乗する事が出来た。途中故障の為、奥川岸で汗を拭ひなどして三時過ぎ奥川上流に向け両側に樹木を有する山道にかかったが山道と思ったのは誤りで進むに従って視野が開け坦々たる平野となり一面の青絨毯が吾々の目を困惑させた。眞の澤部落に着いたのは四時前であつた。そこで十五分位休み再び凸凹の烈しい田舎道をトラックにゆられ四時半ようやく極入製材所に着いた。そこでトラックをおりて一行四十五貫のリュックを背負い陰のないトロツコ道を烈日の暑さの中を漂う事は可なり苦痛であり七時過ぎ彌平四郎部落（四一〇米）に着いた時は流石の山男達も相当我折った様子だった。その部落は戸数四十戸許、小棕、赤城の姓が多く、山形屋、山城屋などが旅館かと思はれる屋號の民家のあつた事は興ある事で後で聞いたのであるが、これらの家は熊の膽を賣るためにその様な名があるとの事である。此辺では冬期、熊、猿、かもしか等が捕れるとの事であつた。

それは餘談として吾々は新潟市の藤島 玄氏に紹介せられた赤城 松五郎氏を訪ね、山案内人を頼んだのであるが、ソバ蒔の時期に當りどうしても行かれないとの事で自分の外にも行ける人があるかどうかを配ってやるとの事で、まずこっちで一泊する予定であつたから宿を交渉して貰ひ先程の山城屋にリュックを下す事にした。家の前の清流で足を冷やしランプの灯で食事を済まし、皆ほととの想いで体をなげ出した。そこに赤城氏がやって来て若者を配て来てくれた。若者の屈強な骨格は如何にも頼もしげに見えた。それから皆、四方山話に笑い興じ十一時過ぎに明日の晴天を祈りつつ寝に就いた。

七月二十一日 朝、同行の林さんが神前に祝詞を捧げられた。吾々の予定は五時出立であつたが案内者の都合で六時過ぎ一行は勇んで案内の小棕 茂氏を先に奥川添ひに田、夏ソバ、油（エゴマ）畑を通りぬけて、オホイタドリ等繁茂した林間を朝露にぬれながらも清々しい朝の香を胸一杯吸ひ清新の氣に満ちて行進し、しばしの後にシナ、トチ、クルミ等の綬樹下に近くの溪流を汲んで朝食を撮る事にした。折しも溪流の音にオホルリの鳴き音を交へて山氣溢るゝばかりひとしほ清新の氣に打たれ大自然に生きる喜びに胸の轟くを覺えた。食後再び林を抜け奥川を左岸に右岸に迷い易い道を案内者に引かれて八時二十五分祓川の合流点に至りこゝで森君は一行を写真に納めた。

八時五十分 いよいよ長坂の登りにかかったが薄い霧の為に遺憾な眺望がきかない。足元は、ぼうぼうたる草に蔽はれて居る所があるかと思へば古木の倒れて行手を塞ぎ居るなど、或はまたぎ、或はいくぐり足跡の稀なるを思はせる所々涯崩れ、斜なる岩角の足巾より狭い細路、千仞の谷底に滑り落ちそうな危険な個所を、案内者に注意され乍ら膽を冷やしつつ進む。アカモノが実を結んで、

やや高所へ来た感を覚える。

午前十一時 疣岩の鞍部（旧尾根道より大日布澤へ下り又、尾根に取り付く所）旧道と新道の合する点に着き、小椋氏の説明を地図と照らし合わせて聞き乍三十分ばかり休み、いよいよ横からみの悪路を足元にふまえ注意しながら進み、左手より流れ下る溪泉に咽喉を潤し更に進むと、トウキ（薬草）、シロバナヘビイチゴ（實がたべられる）、サンカヨウ（實がたべられる）、ニッコウキスゲ、タカイサウ等、又暫くするとナンキンコザクラ、キンバイサウ、ヒメサユリ等、赤黄色の花が渾然一体を優艶可憐さ限りがない花に慰められつゝ、一時二十分、三国岳の頂上の下で剱ヶ峯の岩峰、大日岳、牛首、笠掛水晶等の峯々の雲霧の往来に壯を増す様子を大観した。實に数里に亘る紺碧緑滴る盛夏の大溪谷を抱擁して溪間の白雪に彩られ雲間に穩穩見する壯観は筆舌の及ぶ所でない、壮大なる雰囲気に浸りながら昼食をしたためる。



画 メンバー 林 虎男

三国頂上（筈の王子）小屋跡に一ノ木より地蔵を経て来る道を右手に見て、その頃より降り出した霧雨に遠望をさえぎられ眉をひそめながら中津川、坪川方面より地蔵を経て来る道を右に尾根傳ひにイワウギ、ナンキンコザクラ、ミヤマリンダウ、チングルマ、アオノツガザグラ、タカネキンポウゲ等の咲きほこる道いつしか雨となった。その道をゴザを着て切合迄行く中に雨も小降りとなり時々青空を見せるに至った。そこで森君は早速、大日方面の景勝を撮影する。頂上は砂礫で小廣く小屋跡がみられた。三時、これらの道は流水の為に深く掘れて両側よりハイマツ、笹、ナナカマド等に覆われて居る。ひどく歩きにくい。厄介な悪路を小一時間位登る。草履塚小屋跡に生後一ヶ月位の山兔の子を見出し素早く手を延ばした小椋さんに捕まえられ黒い目を憐れさうに動かして居た。案内者は帰路に持つて行くとて、足を結へ付近の木の根にしばりつけた。可哀想ではあったが彼の話に依れば悪害を為す獣と云うので如何ともしがたい。小雨もすっかり晴れて少し足を速め御秘所の小屋跡についたのは五時すぎであった。少し疲れた一行を待ち合わせて今日中に帰宅をよぎなされた小椋氏と御互野健在を祈りつゝ別れ、天幕米等これまで小椋氏に背負って貰った物を皆で分けて輕からぬ荷に更に重さを増したリュックを気にしながら御前坂急坂を登り飯豊本社と思はるゝ所に至った。

今夜の夢はこゝで見る豫定だったので、この辺に或る筈の小屋を探したが見當らず、少し慌て気味で逃げた小屋を探してゐる内に霽行く霧間に忽忽然と一きは高く石を積み上げた御宮と小屋が表れ人を食った様に苦笑してゐる様子は吾々を啞然たらしめるに充分であった。

子供の様に喜んだ一行は、今度は逃がさぬ様に小屋を見つめながら勇んで三角点にほど近く朽ちて崩れかかった三尺四方位石垣に圍まれた名のみのお宮（ではあるが石燈二基社務所の柱等附近にあった）に参拝した小屋と云うのも石に囲まれた二棟の二間三間位の板敷きで入り口の脇に火気使用所等があり往時の繁榮が偲ばれた。今夜は其の一棟を拝借して宿る用意に取掛かる。薪はハイマツの枯れたものを持来り、水は北四、五十米程下った所の雪を解かしてこれを宛て、その他は各自持参した野菜類等、それに皆の副食物等を併せ夜の献立はなかなか下界では味へない豪盛さだ。食



画 メンバー 林 虎男

後は茶をわかつて雑談笑話に時を忘れながら濡物を干したり明日の兵糧を作ったりして漸く寝に就く。戸外は寂として物音絶え只月のみ皎々として音なき雲海を物凄く空昭し出す。森君に誘われる儘に外に出で夜の静寂に月光の青白くも冷き光の内に体をひたす。近くの山々の頂は光を受けて影を投げ北斗星輝き明日の行の楽しさを覚えしめる。

七月二十二日 五時頃目をさまし外に出づれば朝露に濡れた、ガンカウラン、イハウメ、コケモモ、ツガザクラ、ミヤマウスユキサウ等のキラキラ光る様、大日岳、御西岳に對する方に豊豊の影を投げかけ谷間の霧に御来光を見る。朝食を喰ひ御宮を拝し、飯豊三角点に向ふ。八時二十五分祈念の為と小さい松を探すなどして、八時四十二分豫定のコースを望見すれば稍濃き霧の為ガイド無しの初物では少し不安を感じ変更して大倉切八尾根を下る事に一決した。

九時、北に向かつて廣い尾根道をハクサンオミナヘシ、ミヤマダイコンサウ、オヤマノエンダウ等、色鮮やかな高山植物に歓迎され見送られて下る。事暫し1,811米の寶珠山（地形図には名称記入ナシ）より西南を望めば頂上八、九合目より上は濃霧霽れず見る事が出来なかったが、御西岳、烏帽子北股内岳、地神（扇の地紙）の連峰各々に雪を見せ足下檜山沢の溪流の音、烏帽子のびる尾根をはさんで梅花皮沢、これに落ちる小沢が手に取る如くなるも、東方大又沢、大丸森山の尾根續は霧で姿を現はさず時に部分的に望見するのみ今日の様に曇コースで霧が時々押来り吾々を猛烈なる強き日光から保護して呉れるから良い様なものゝこの様な恩典がなかったらとしたら大分へばったと思ふ。水は一滴も得られない、この様な天候は此の尾根下りにはあつらへ向きの日和である。北方、を雪をいただける朝日岳雲の間に間々望見される嶺を行き中腹を溺み、切り立つ岩山に攀じ登り、ヒメコマツ等の老木枯死せるの、幾百年其儘の姿にて幾十年か経て、立てる様、實に奇である。下るに従ってなほ増す如き四十八の峯と、長年手入れのなかったため實に甚しく荒廃した尾根道に度々踏み迷ひ、或は一歩踏み外したら轉落しそうな断崖の細路に膽を冷やしながらも、ヒメサユリ、タカネナデシコ、オホサクラサウ、ナンキンコザクラ、キンコウクワ、キンバイサウ等の美しい花雪路の残りに慰められ、タヒバリ又、遠くミソサベエ無数に飛び交ふ赤トンボ等に楽しみながら千本

峰、1,320米の三角点に到る。これよりの下降は非常に急斜面の滑り勝なる坂路両側の枝につかまり或は、ぶらさがりながら降りる。同行した七十一歳の林老人の苦勞が思ひやられる。三、四十代の人に立交じって劣らじと行動して、植物を採集したり、種々の物に興味を持って歩く老人には疲れは少しも氣に掛からないと見える。こちらはヒメコマツ、コメツガ等に苔むしたる奇岩、巨岩の間に風雪に揉まれて虐げられつゝ生ひ立った曲折せる古木、老幹サルオガゼを付けた枝を交へ立って居る。其風姿は如何なる名公園のそれよりも勝れる感ある。

一同自然の美を歎賞しておかなかった。而も深山の感を失わない樹下にはツバメオモト、マヒズルサウ、ツマトリサウ等漿果を付け中々風情がある。水に渴えた一同は溪流の近くに元氣百倍して大又沢、檜山沢合流点に午後八時十分着。少し後れる事を覚悟すれば、ヌクミ平発電所小屋迄行けるが眼前の沢渡りを大事取って此河原



画 メンバー 林 虎男

に天幕を張り流木等を集め、残りの飯をかゆにして夕食をなし天幕にはいったり焚火の側に寝そべったりして時の霧雨又、雲間より漏るゝ月、カジカの鳴音、沢の釣を楽しんだり自然の間に一夜を明かす。

七月二十三日 晴れ少し曇り 今日いよいよ里に出る豫定なので元氣つける為と森君、取って置きのミルクは非常に吾々を喜ばせた。それから飯を炊いて各自リュックに詰め、九時大又沢を横切り對岸に道を求め直ぐ玉川本流に出、斜に膝を没する程の所を渡り右岸に取り付く。ブナ、トチシナ等の樹木の道を玉川添ひに下り梅花皮澤の危なげな吊橋に膽を冷やし暫くして又、前より確な吊橋を経て九時四十分ヌクミ平の小屋に到る。こゝかねて便りをして置いた、高橋 繁太郎氏夫妻に迎へられて、爐辺に足を投げ出して茶を頂き、林老人の年齢に高橋さんが、この地出来てから十数年になるが、其様な高齢な登山者は初めてだと、老人の元氣に感心して色々話を聞いたり等してねぎらってゐた。十時十分、又の来山を約して見送りをうけ坦々たる道を沢に架けられた橋を渡り、更に湯沢の橋を渡って小玉川温泉（飯豊温泉とも云ふ）にゆっくり山間の湯を楽しむに一決し地神山よりのびる尾根を横に搦む十数町の坂路岩間より湧出する泉に舌をうるほし午前十一時十分、目的の小玉川温泉に着いた。

この地は谷の奥より押して来る雪崩の為小屋を建てゝ置く事がないとの事で吾々の行った時は小屋掛けの最中であつた。温泉は上流谷の側面より湧き出る温湯を引いて二間に四間位の中に仕切りを付けたコンクリートの浴槽に屋根をかけた簡単にして實用的なものであり浴客は、皆この浴槽で湯浴するものであつた。湯の成分は確かなことは分らぬが鉄分を含み四十五度位の適のすこぶる快適な温泉である。

宿は九戸出来るとの話であつたが、吾々の行った時は只、一軒漸く出来かけた「越後屋」本間彌助方に交渉して一間（八畳數位）を借り受け汗を流し昼食をとる。この簡易温泉宿は冬期は岩山に穿った横穴にそっくり畳み込まれるのだそうだ。何にしてもやま気分のする地である。食後、森君と共に上流温泉の湧出する様を見に行く途中、山の乙女等、雪消えの地に山菜を摘み来るに曾ひ、そ

の山菜の名を尋ね試食をやるのも面白いと語らいつゝ暫し湯沢を登る対岸所赤い湯花の間より湧出する様子が實に面白く興味深い事であった。

帰りには先に乙女等に教えられたドコナ（本名ヨブスマサウ、庄内地方ではクワダイ）それにアカミズ（ウワバミサウ）アラミズ（ヤマトキホコリ）ムコナカセ（アキギリ）アザミ等を探し廻り夕食に砂糖、味噌等で試食する。これはあっさりした味で中によい香気のあるものもあり、林さん等特に喜んでゐた。それから森さんが持参したヒヤムギを砂糖、味噌で味をつけ、ランプの下で皆、悦んでご馳走になり天幕を擡げてめぐりこむ。

七月二十四日 四時起床、朝飯は途中でと、茶を沸かし五時二十五分、長者原九時頃発のトラックに間に合う様にと玉川本流右岸を急ぐことに暫し此の邊対岸にそびえる岩骨険峻なる倉山（925米）を始め隆々と峙つ連峰、霞を帯びる雄姿又、藍を流す玉川の清流、瀾となり瀬と成り或は巖に激して白波飛瀑の変幻極りなく到る所の奇景目を樂ませない所がない。惜むらくは悠々觀賞の時間がなかった事である。七時近く風景絶佳なる旭又瀧前の吊橋を過ぎる。此附近より森君は、式貫有餘、山の形したる自然石を記念の爲リュックに入れ、八時十分、川入部落に入る。この辺より漸く田畑等見え人家も二軒（横山、藤田）許り見えた。振り返れば、川岳、地神（扇の地神）杵差、澤々に雪を見せ霧の間に望み、次回の石コロビの登りの面白さ想像しながら長者ヶ原へ着く。九時、発電所前より吊橋を渡り、泉岡部落へ九時三十分着。朝飯を済し長者ヶ原附近より産する石膏岩を積んだトラックの来るのに便乗し、折からの雨にゴザを着て玉川、中里、山崎、向片貝、玉川下新田、を通り米坂線、玉川驛（小国本村）に一時頃着。二時五十分發列車で途中、坂町で乗り換へ村上を経て家路に就いた。

要 記 一行 六 名 （鶴岡山岳会員）

会幹事・記録係	石 井 貞 吉（五十歳）	会 幹 事	佐 藤 辰五郎（四六歳）
	高 橋 末 松（四三歳）	会 計	阿 部 清三郎（四六歳）
会幹事・リーダー	森 茂 八（三六歳）	写 生 係	林 虎 男（七一歳）
案 内 者	福島縣郡麻郡彌平四郎村 小 椋 茂（三三歳）		

日 程 四泊五日（昭和23年 自7月20日～至7月24日）

七月二十日	鶴 岡 發大阪行（前5：50）	新 津着（前10：42）・發（前10：55）
	徳 澤着（後1：45）	彌平四郎着（後7：00）
七月二十一日	彌平四郎發（前6：20）	旧新道合致点着（前11：00）
	飯豊頂上御宮着（後6：10）	
七月二十二日	頂上小屋（前8：25）	大又沢、檜山沢合流点着（後8：10）
七月二十三日	大又沢、檜山沢合流点發（前9：00）	小玉川温泉着（11：10）
七月二十四日	小玉川温泉發（前5：35）	長者ヶ原着（前9：00）
	玉川口驛着（後1：00）	發 後2：05） 鶴岡驛着（後6：05）

費 用

鶴岡～徳沢間汽車賃160円 徳沢～極入間トラック代30円

彌平四郎宿泊料35円（一人當り） 案内料400円 赤城氏礼金50円

以上六人ニテ。 小玉川温泉宿料30円 長者原～玉川口驛間トラック代50円
玉川口驛～鶴岡間汽車賃100円、外雑費約100円 以上四口（各一人當り）

用 意 品

米 二升、握飯三食分、食パン一食分、鰹味噌（汁料）、砂糖、
副食物（馬鈴薯、玉葱、茄子、等）、焼酎、嗜好品（ミルク、蜂蜜等）、薬品、
ワラジ三足、冬ジャケツ、替シャツ、綱、ケッテル、金カンジキ、天幕一張、
ランタン、ロウソク、マッチ、固形アルコール、懐中電燈、地図（1／5万・1／25万）

以 上



飯豊本山 山頂神社

飯 豊 山 有 情

木 村 喜代志

飯豊山の山名そのものが、生産の豊かさを思わせるものがあり、何か温もりに似たもの感じさせてくれる。しかし、山名から受ける印象とは裏腹に、日本山岳会の今西錦司元会長さんに、「飯豊はとてつもない大きな山である。日本でいちばん大きな山であるかもしれない。巨像といっても、長鯨といっても、形容にならない大きな山である。」（「飯豊連峰」・誠文堂観光社）と言わしめた山地である。

東北の山々は、奥羽山脈を中心に太平洋側に北上・阿武隈山地、日本海側の出羽山地と朝日・飯豊山地を中心とする越後山脈の三列の構造になっている。その中で飯豊山地は奥羽山脈の吾妻連峰に楔のように打ち込まれ、越後山脈と奥羽山脈を結び付けている。2,105mの大日岳をはじめ飯豊山、北股岳、御西岳、烏帽子岳、梅花皮岳など2,000mの山々が連なって、山形、福島、新潟3県にまたがる山地で、「飯豊山脈」の感がある。

飯豊山地は豪雪地帯としても知られている。雪解け水は山の動植物を育み、木地屋とマタギ、里に流れでた水は水田を潤し、人々と深い関わりを持ってきた。従って山裾の人々にとっては恵をもたらしてくれる山であり、畏敬の念を起こすのは自然の成り行きであったと考えられる。

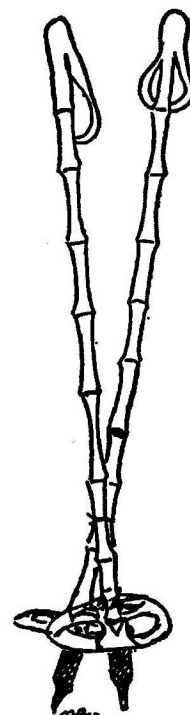
飯豊山山頂には、飯豊山神社が祀られている。一説によれば役ノ小角（エンノオズヌ）の開山といわれており、江戸時代に信仰登山の対象として開かれた。今日ではほとんど見る事が無くなった白装束に身を固めた参拝者が通ったコースに、草履塚、御秘所、御前坂などの地名が今も残る。なお飯豊山神社の神は女神で、女性が近づくと石になってしまうという言伝えがあり、長い間、女人禁制の山であった。

このような神の山、飯豊山も 1922年、沼井鉄太郎^{※1}による飯豊連峰初縦走が発表されている。そして、1930年、小林文平氏・藤島 玄氏・高校生4名が加藤新六氏らの案内で飯豊山から杵差（エブリサシ）岳までの縦走がなされ、全容が明らかにされた。

※1 沼井鉄太郎（1899～2001）秋田の人 旧制二校から東大へ、1935年卒 早くからスキーに親しみ、学生時代に 蔵王、朝日連峰などにスキー登山卒業後、冠松次郎と黒部廊下初遡行発展期の日本山岳会に大きな足跡を残した。

そんな中であって、鶴岡にも飯豊山に憧れ続けた人たちがおり、1948年に石井貞吉^{※2}による「飯豊山紀行」が発表されている。

※2 石井貞吉（1899～2001）鶴岡生まれ J A C 3525 1925年 朝日連峰縦走（山高山岳部に同行、史上2番目）1928年 鶴岡山岳会創設 1936年 中房温泉・槍ヶ岳・上高地 1942年 大町針ノ木峠・立山・剣岳・室堂1950年 朝日連峰八久和川初遡行 1965年 月山北面でヒナチドリ発見 1968年 月山でアオモリトドマツ発見、オゼコオホネの北限をを月山で確認。



「昭和二十三年七月二十日、私は十数年前から登りたいと心がけ紀行文や地図等で憧れて居た飯豊山登攀が実行せらるゝ日が恵まれて、年来の宿望が達せられることになった」で始まる手書の記録である。飯豊山山頂の様子を次ぎのように述べている。

「……三角点にほど近く朽ちて崩れかかった三尺四方位石垣に囲まれた名のみのお宮に参拝した。小屋というのも石垣に囲まれた二棟の二間に三間位の板敷で、入り口脇に火気使用所等があり、往時の繁栄が偲ばれた。今夜はその一棟を借して宿る。……外に出で夜の静寂に月光の青白くも冷たき光の内に体をひたす。近くの山々の頂きは光を受けて影をなげ北斗星輝き明日の行の楽しさを覚えしめる。」

用意品として、米2升、鰹味噌、ワラジ3足、金カンジキ、焼酎などが見える。コースは、福島県の登拝路、弥平四郎口から入山し、山頂からダイグラ峰を降って温身平を経て、長者原へ下山。メンバーは、最年少36歳、最高齢71歳の6名で、山頂まで案内人1人雇用と記されている。

なを、文末には微笑ましい絵が20枚添えられており、最後に、深山幽谷の中、騒々しい世間を離れて一人超然とした脱俗の心境を詠った「白雲抱幽石」※₃と唐代の禅僧・寒山の詩を書き添えてある。

終戦後たった3年、全てのものが不足している時代の山行であったが、山頂で一夜を過ごし、焼酎を嗜み、気持ちを漢詩に託しつつロマンチックな紀行文を綴るという、なんとも優雅な様子が、時を越えて思い浮かんでくる。

飯豊山にはじめて登ったのは、1954年、高校2年8月、山岳部の同期のWT、KKの3名でだった。長期山行後、家でごろごろしているうちに、急に山の虫が騒ぎ出し、出かけた。雨に会うこともなく、時折り湧き出す霧に身体を冷やす程度の晴天続きだった。コースは大日杉から入り切合小屋、飯豊山、御西岳、北股岳を経て、梶川尾根を降り長者原に下山した。主稜線までは急坂が続くが、大きな雪田を載せて打ち重なる山なみの主稜線に圧倒された。そして、ホームグ



飯豊山・石転び沢

ラウンドにしていた蔵王から見ていても大きな山塊だが、登ってみると一層の大きさに驚き、押し黙ったまま足早に先を急いだのを覚えている。

また、高校山岳部OBの有志で結成した社会人山岳会で、蔵王中腹に山小屋をもっていた。会の支柱として活躍されていたUHさんが中心となって計画された飯豊山での春山合宿は、学生時代の思い出に残る山行となっている。

長者原から入り、温身平を経て地竹原にベースキャンプを設けた。連日、滝沢からクサイグラ尾根へ、入り門内沢や石転び沢と遊び廻った。ベース設営時に1m近く雪面を掘り下げて張ったテントが、撤収するときには周囲の雪面から30～40cmも盛上がっていた。帰りは旭又沢からの雪崩を警戒し、温身平から山を越えて泡ノ湯にでた。途中2、3日前に立ったとは思えない白い山なみを振り返っては、登る前に遠望した時と同じ心のときめきを覚えた。

高校で山岳部の顧問をしていた頃、夏休みの長期山行は朝日連峰と飯豊連峰を交互に組み込んでいた。どちらの山でもベースキャンプを主稜線に設けて、より広く歩いて、帰路は長大な尾根を降るのが不文律になっていた。

飯豊の場合は、石転び沢を登って、十文字鞍部の西、洗濯平にベースを設け、帰路は杵差し經由大熊尾根、あるいは門内岳から胎内尾根、北股岳からオオイン尾根を利用していた。

長大な尾根を降り終え、単調な林道を歩いている時だった。秋の学校行事である10km走話題になった。そのトレーニングを延長して、冬山前に長い距離を走ることになった誰からともなく出てきたのが、鶴岡から酒田往復46kmだった。10数人で国道7号を走っていると、走行中のダンプから“頑張れ！”の声が飛んで繰るほど長閑な時代だった。血気盛んな30歳前後の思い出であった。

山形県が「朝日連峰」、「吾妻連峰」に続いて飯豊連峰の学術調査を1966年から1969年に実施された。学生時代に朝日連峰で積雪期の写真提供、吾妻での関わりなどから地理の末席に加えてもらった。

主稜線上に見られる氷河周辺に見られる諸々の地形や石転び沢雪渓末端部での氷河調査、新潟県の日本海に注ぐ飯豊の豊かな融雪水を、水不足で悩む白川流域へ隧道を開削して最上川水系の白川へ流した穴堰、養老四年（720）の信仰登山路が福島県に引き継がれた結果が、山形、新潟県境に細長く割り込んだ複雑なものになっていること、近代登山史などなど飯豊山を単に登るだけの視点から幅広い見方への変えてくれた。

飯豊の地形図を見ていると、他所では見られない地名を散見できる。オオイン、ダイグラ（大嵩）尾根、ギルダ原、エブリザシ（杵差）岳、カイラギ（梅花皮）岳などなどである。いずれも見慣れないものばかりで、飯豊の山の原始性を強調しているかのようにも思える。しかし、文献や先人の知恵をお借りすると神の使いのオオカミ、田園、農具、刀などとの関連が明るみになり、飯豊山を特色付ける信仰の山に結びついているように思えてくる。

学校の近郊を走り回り、山中を歩き回った当時の生徒たちは、還暦前後となった。地元で頑張っている人、鶴岡を遠く離れて暮らす人、事故や病で亡くなった人と様々だ。ひたすら歩いた長大な尾根、鶴岡・酒田往復ランニングは、40余年という年月で浄化されて彼らの心のアルバムにどんな画像となって残っているのだろうか。なお、彼らの母校の山岳部は、部員不足で数年前に廃部になっていることを昨年知った。

また、自分にとって山への契機となったのは、高校山岳部だった。そのOBの有志で結成した社会人山岳会は解散し、蔵王中腹、パラダイスゲレンデ近くの山小屋も1999年40年間の幕を閉じた。

山小屋の四隅に植樹されたコブシの木が当時の名残を留めている。(3/2011)

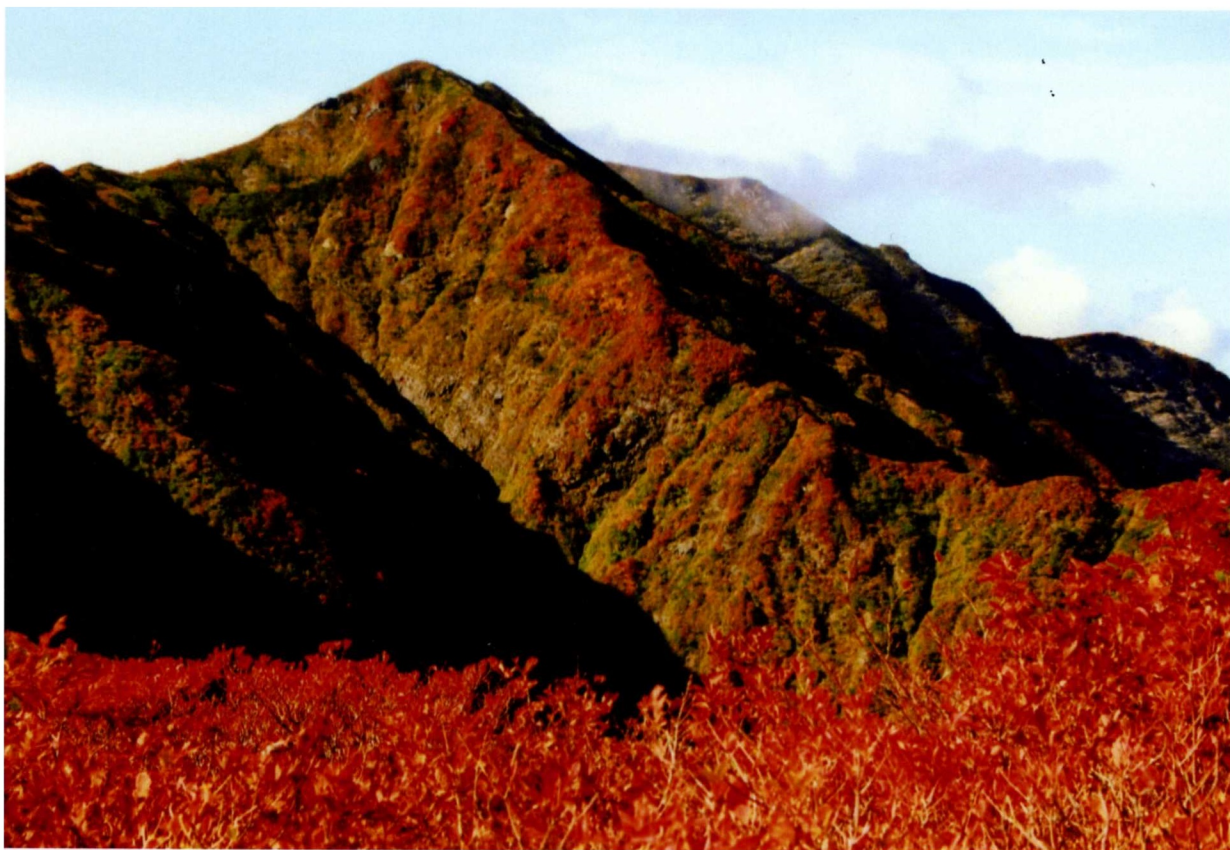
※3 白雲幽石を抱く(白雲抱幽石) — 「寒山子詩」

「重巖我ト居、鳥道絶人迹。庭際何所有、白雲抱幽石。

住荘凡幾年、屢見春冬易。寄語鐘鼎家、虚名定無益」



クモシダ (しだ科)



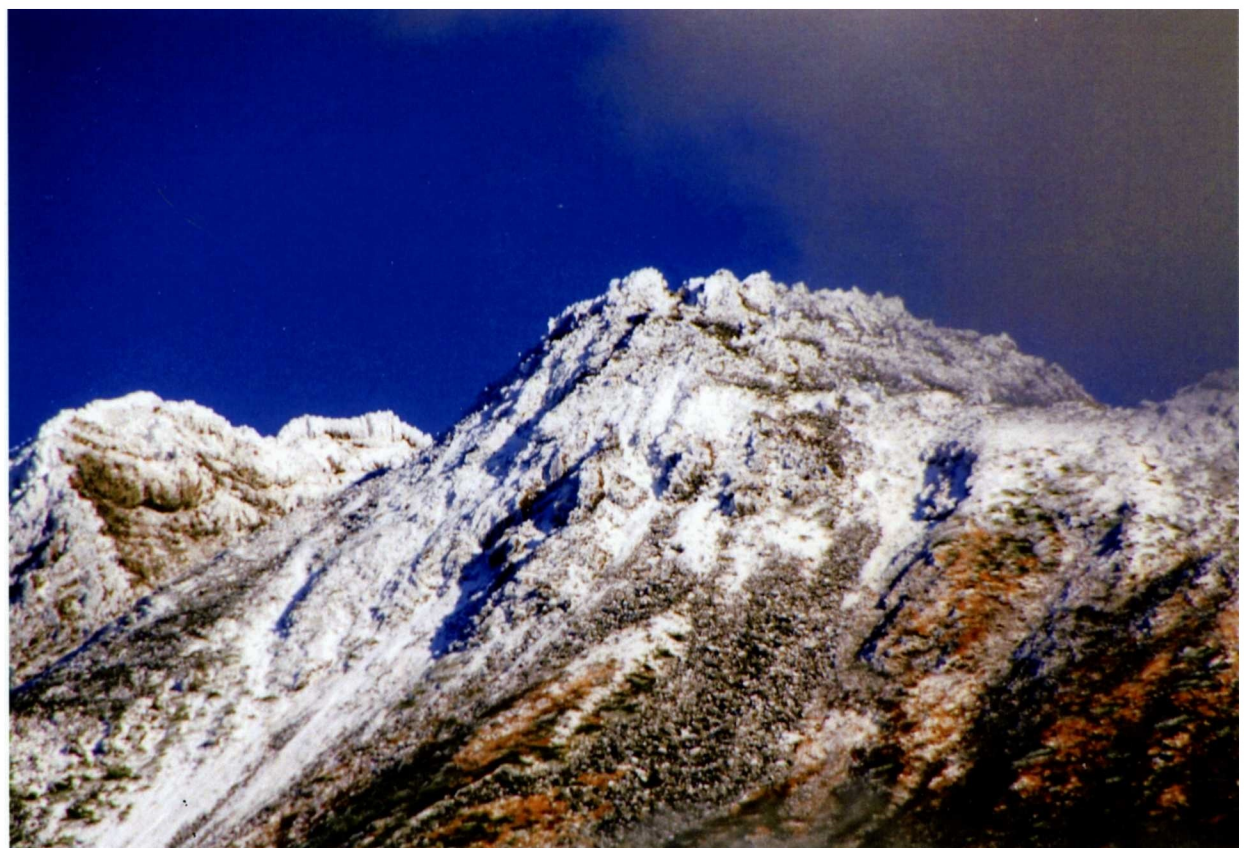
写真「紅葉の障子ガ丘」撮影 梅津誠一（2017／10）



写真 公募登山葉山「山に集う」撮影 菅原富喜（2012／10／21）



写真「5月の鳥海山」撮影 梅津誠一（2017／5）



写真「初冠雪の鳥海新山」撮影 梅津誠一（2017／10／19）

一人山旅の記憶

今 野 秀 穂

ここ数年のあいだ、風の吹くまま、足の向くまま、一人県外の山々を歩いた山の中で心に残り、心に刻まれた事柄を、記憶にたどって簡単に書いてみました。

戸 隠 山 戸隠山を縦走の終りの沢を下山中、豪雨による鉄砲水に、あっという間に襲われ、かろうじて無事下山。修験者の山というだけあって厳しいものがあった。

**男 体 山
白 根 山** 観光案内所で紹介された民宿は、古くて暗く、玄関の戸をようやく開けたとたん、子牛ほどの大きい黒いものがとびだしてきた。熊だと思ってびっくりしたが犬でよかった。男体山は一直線の急登で、白根山は、ゆったりした山だった。

**那 須 岳
朝日岳～
三本槍～
茶臼岳縦走** 早朝、高速道路を走り那須三山を縦走し、登り終えて近くの宿に宿泊を頼んだところ、すべて断られた。むさくるしい山姿のせいか、そのまま帰る。
日帰り登山でも、かなり遠くまで行けることを実感する。山はあまり高低さはなく楽しく歩けた。

火 打 山 山頂で知り合った人が、私と一緒に、朝日連峰に登った仲間が疲労のためその山で亡くなった、山形の山を思うと胸が痛むと涙ながらに語ってくれた。
山は、高山植物が豊富で夏空が青く広がった。

北 岳 北岳山頂小屋で知り合った人が、翌年、天童の私の仕事場まで私をたずねてきてくれた。気の合う山仲間はどこにもいる様だ。よかった。北岳から望んだ夕映えの甲斐駒が印象的でいつか登ろうと心に決める。

八ヶ岳縦走 山ろくの山小屋をでて間もなく「虻」の大群に襲われ大変だった。赤岳から行者小屋に至る登山道に、よく懸けたものと感心するほどの長い鉄梯子が架かっていた。架けた人の苦労がしのばれた。駒草が咲いていたが、蔵王の駒草と姿かたちが少し違うようだ。登山者の多いのに驚いた。

西穂高焼岳へ 西穂高より焼岳までへの山路は、だれとも合わず長かった。
焼岳に登り終え上高地に下山。その夜梓川で無数の蛍が乱舞しており幻想的だった。

常念岳～
奥穂高
西穂高

常念岳をこえ蝶ヶ岳をこえ急な長堀尾根の霧の樹林を下り涸沢へ。涸沢の雪渓では大きな猿の群れが遊んでいた。穂高小屋に泊り翌日北穂高へ。北穂高小屋で憩っていた。

外人が、「どこから来たのか」と言うので、昨日、常念岳を登って今ここに着いたと言ったら「ウェー」と驚いていた。

奥穂高から北穂高への縦走は、岩のずれる音がして緊張した。又若いころ、野宿してここを通ったことを思いだし、感無量だった。

徳本峠～
霞沢岳

徳本峠登山入口から徳本峠そして霞沢岳までは遠く、K1ピークでは、雨と濃い霧に会い引き返す。

登山者はだれもおらず、方向感覚がわからない程の霧と雨に遭遇、山の厳しさを再認識をする。

剣 岳

剣岳へ登ることは、一つの願いだった。早朝、満天の星のもと、山小屋を出発。夜明け、雷鳥の底鳴きの声をききながら岩を登った。山頂から望む朝焼けの山々は素晴らしかった。

谷川岳
(西黒尾根)

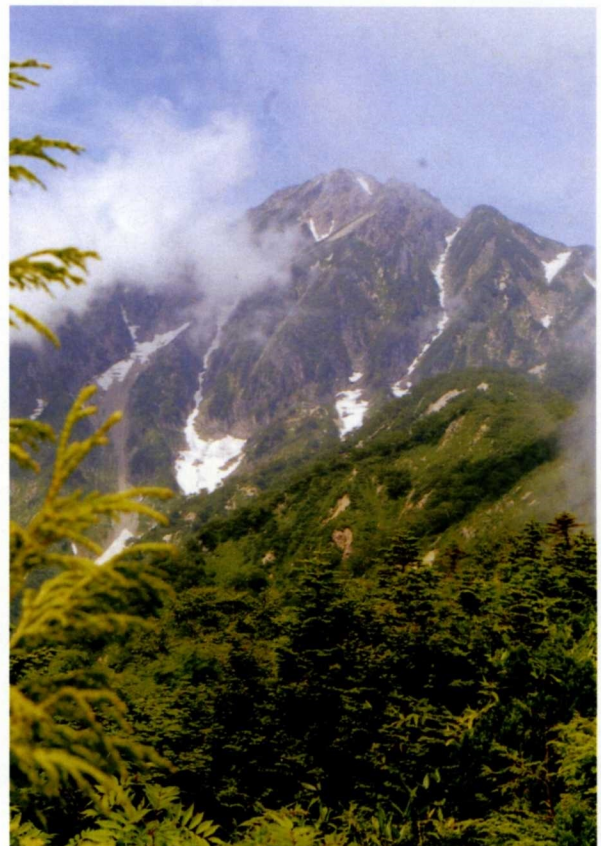
谷川岳の西黒尾根は、日本三大急登の一つであるというので、早速登ってみた。普通、谷川岳に登るには、厳剛新道か、天神尾根を登るらしく、西尾根を登る人はほとんどおらず、谷川岳山頂「オキの耳」には予定どおり登れた。山頂には霧が流れ、数多くのトンボが舞っていた。

甲斐駒ヶ岳
(黒戸尾根)

甲斐駒ヶ岳の黒戸尾根も日本三大急登の一つであるというので、これも早速登ってみた。この尾根もさすが急登を登る人は二人と会っただけだった。小雨の中を黙々と登る。途中にある七丈小屋の管理人が自然保護について熱をこめて語ってくれたのが印象深かった。

山頂にいた登山者が黒戸尾根を登ってきたが、「何歳ですか」と何度も聞くので「年令は後期高齢者だ。山形の人間は、この位の山はみんな登れる」と、強がりを書いて答えたが、本心は厳しかった。

帰りは北沢峠へ下り、スーパー



遠見尾根より五竜岳を望む (H24/8/10)

林道から振り返る。甲斐駒ヶ岳は白く輝いていた。よい山行だった。その後、ブナ立て尾根をめざしたが、台風接近ため途中で戻る。

五 竜 岳
(遠見尾根)

日本十大急登と言うので心が動き、これまた早速でかける。この尾根は主に下山路につかわれるらしく五竜からの下山者は多いが登る人は少ない。登山口より何度も登り下りをくり返し五竜山荘にいたる。クサリ場の急登がつかった。翌朝、山頂をふみ無事下山。上高地に向い、山研に一泊し帰路につく。五竜岳も新鮮などっしりした心に残るよい山だった次の急登は剣岳の早月尾根を是非登ってみたいと思っている。

燧 ヶ 岳 ・
至 仏 山

尾瀬には、ほとんど毎年通います。残雪のころだったり、ニッコウキスゲの花が尾瀬ヶ原をうすめつくす夏のころだったり、ハイカーの姿が木道から姿を消す草紅葉のころだったりです今回の尾瀬山行最後の日、時間の配分を間違い帽灯だけを頼りの下山、予定より二時間も遅れての午後七時、民宿の親父さんに、何かの事故でもと、心配をかけ深く反省する。今年の尾瀬と周辺の山旅は草紅葉の真っ盛りの十月中旬でした。

山を歩いて六十余年になりました。よく飽きないで、晴れた日は勿論のこと、雨の中や風雪の日もかまわず歩いたものです。

それは生まれつき、山やそこにある空気をふくめ、諸々の動植物そして山仲間と相性があったからだと思います。

私にとって山は、単なる自然の一部ではありません。山に入っているとしみじみ自分は生きている証だとも思います。

今後も歩けるかぎり「山屋人生」をつづけていきたいと思っています。

雨の日は酒を飲みつつ本をよみ 晴れりやザックかついで山へとぶ

以 上

げ ざん か 下 山 家

—地蔵尊より蔵王ダムまでカンジキトレッキング—

會 田 茂 雄

蔵王ロープウェイ山麓駅にて総勢五名揃い山頂駅へと向かうが、先程まで見えていた朝日連峰は雲の中へと消え前途に不安がよぎる。早速山頂駅にて登山届に記入し提出する。

気温は-3℃で弱い風があり上空は高曇り熊野岳は遠望出来た。スキー客、観光客もまばらである。早速地蔵尊へ今日一日の安全と天候を祈願する。その後すぐ後ろより八方沢へと入り込む。

雪質はカンジキが15cm位入り込む湿り雪で下層はアイスバーンなし、コーボルトヒュッテへの目印のパイプが前方にありそれを右手に見送り進む。左手に三宝荒神山、正面に雁戸連山、右手には裾野を広げた主峰熊野岳も雪が多く地肌をまだ出していない。そして春に天童周辺より見た時に熊野岳の北側に残雪が見られたがその深い沢を間近に見られる。コースは三宝荒神山よりの沢を望みながら尾根筋を忠実に下る。

標高1,384m 10:45 この辺に来ると、地蔵尊よりのアオモリトドマツのみであったがアスナロも混じってくる。前方には自分達が低い位置に来た為に鋭角なピナクルになった南雁戸山、その奥に大東岳始め、船形連峰がぼんやりと望めた。大分下って来たので風は頬に感じなくなる。

ここより一本の沢をトラバースする。三宝荒神裾野、左手の奥にある沢は「葉の木沢」である。アオモリトドマツが少なくなると代わりにヒメコマツが現れる。と眼前にアスナロの巨木が至る所にあり、その内一本は胴回り5mはあろう。そんな折、ホシガラスのけたたましい一声あり、その時ウサギが前方を横切り周囲には足跡が縦横無尽にある。南雁戸山はますます天を突くように鋭く見えて来る。地形は風の影響で雪面の一部が溝のように深く切り込んでいて、そこは美しいカーブを描いている所へ出会う。

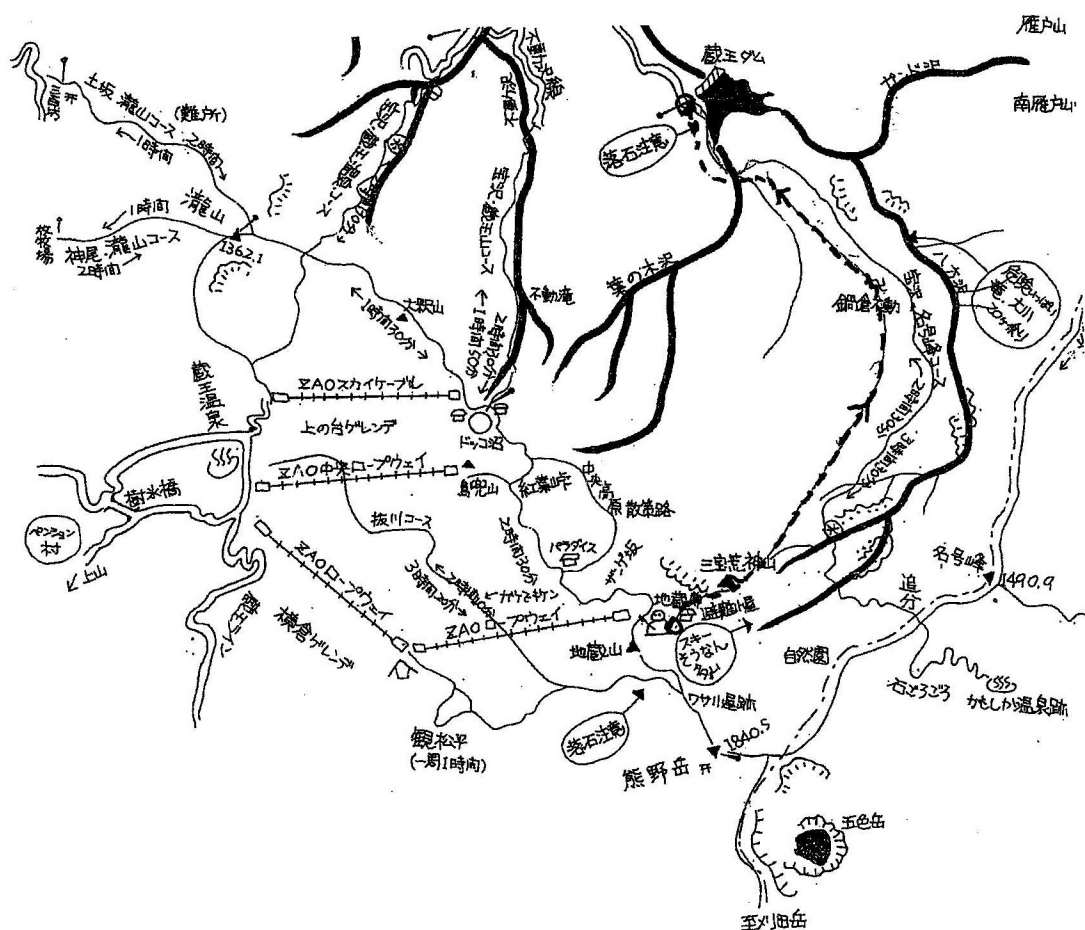
標高1,284m アスナロ、ナナカマドに無数の熊の爪跡が、こんな細い木に登るのかと思われる。ましてナナカマドの実とは冬眠前、最後に食べるのだろうか。この辺のブナは遮るものなく真っ直ぐ伸びている。その先に熊棚があり昨年はブナの実が豊作だったのか一本の木に3~5ヶの熊棚も見られる。この熊棚の写真を撮るとするも月山のように低い木がなく高い木ばかりで人物を入れての写真が撮れず残念。突然シジュウカラの声が聞かれるが何を食べているのだろうか。気温が上昇したのか生暖かい風が通り過ぎて行く。街では気温が上昇しているのだろう。

標高1,147m 12:05~45分まで昼食。この辺りのブナの背が高いのばかりでエサになる小枝がない為かウサギの足跡はさっぱり見当たらない。暫く進むとブナの木が全然なくなり、一面ミズナラの純林になる。先人が炭の材料にする為に植林でもしたのだろうか、標高も随分低くなり雪も腐りカンジキに大きな雪玉が付き足が重くなる。前景はミズナラ林、その奥には南雁戸山のピークが青空に突き出ている。

標高1,080m 雨量観測所の建物は完全に雪の下でアンテナのみが見られるのみ、例年だと建物が出ていたとの事だが、今年は積雪が多いのか、気温が低く雪が消えない為なのだろうか。前方林の中に杉林が現れる。そこには神木としてその中に「鍋倉不動尊」があった。14:00~14:30 山門も雪に埋もれて、山門を通して僅かに先が見える程度である。

それより僅か下った所には巨木があり、ブナの木肌には熊の爪跡が無数にあり、まるでナスカの地上絵のようだ。一方別な所では木に熊が入るような祠も見られた。まだ夏道は出ておらず、急坂のトラバースぎみに下降が延々と続く。左手には葉の木沢、右手は八方沢で雪庇が張り出している。最後のピークを八方沢側を回り込み台地に下ると、漸く登山口の看板のある所へでる。 15:30~15:40 そこからは蔵王ダム本体は眼前だが、道路はダム護岸のまわりを延々と続き道路には至る所へ上部岩壁より雪崩跡がありブロックが周辺に散らばっている。その上を進む。 16:50~17:00 漸くダムの管理事務所到着。この時マウンテンバイクに乗った若者がやって来る。振り返ると暮れなすむ雁戸山、南雁戸山の稜線が夕陽に照らされて光っていた。時間も迫って来たので、急いで下山にかかるが途中至る所で雪崩跡があり、時折、大きな氷の塊が見られた。舗装道路を黙々と下る。 17:40 朝、登山前に車を駐車している所へ到着。急いで蔵王温泉へと向かう。 18:15 蔵王ロープウェイ駐車場到着。ここにて解散。その後3台の車に乗車し下山する。

2012年3月30日の記録



鳥海山スキー登山

粕谷 俊 矩

日 程：2017年3月11日（土）12日（日）13日（月）

山 域：鳥海山湯の台コース

宿 泊：山雪荘（標高860m）

参加者：安井康夫（会友） 田邊信行（会友） 高橋毅（会友） 後藤彰 粕谷俊矩

瀬川昭（12,13日） 牧和秀（12日日帰り）

行 程：2017年3月11日（土） 晴。

午前9時酒田市八幡のA-COOP 駐車場に全員集合。後藤が既に購入した食料を分配する。10時20分、大台野T字分岐出発。先行者のスノーシューのトレースがあり助けられる。これは山形県西川山岳会十数名のトレースであったことが後日判明。感謝。数日前に降った湿った雪が20cmほど積もっている。13時20分山雪荘到着。小屋は2m近い雪に埋もれている。約2時間ほどの除雪作業で明り取りの窓を掘り出した。屋根の雪を半分ほど落として疲労困憊。雪下ろし作業中後藤が夕食の準備。献立は野菜なべにうどん。無人の小屋では市販の2Lのペットボトルの水は凍らないが沢水や水道水は凍るとか、500mlの缶ビールは凍るが350mlは凍らないといった現象があるらしい。

3月12日（日）晴。6時起床。8時、安井、田邊、粕谷の3人が山雪荘出発。先行者のトレースに助けられて10時に滝の小屋到着。多くのスキーやスノーシューがデポしてあるところを見ると、昨夜小屋に泊まった人々はアイゼンで山頂に向かったらしい。河原宿に向かって赤布の標識がたっている。クトーを着けて滝の小屋北面の大斜面を登る。11時20分、河原宿到着。外輪には傘雲が架かって風が強そうだ。今日はここから引き返すことに意見が一致。滝の小屋を目指して滑る。鳥海山特有の湿って重い雪だ。小屋のそばでぼくらの滑りを見ている方がいた。山の雑誌『山歩きの雑記帳』の編集長佐藤要氏だった。氏はこの季節の影鳥海の写真を撮ろうと滝の小屋をベースにして頑張っている。小屋に入って佐藤氏と一緒に昼食を摂る。午後1時滝の小屋出発。宮様コースを快適に滑る。14時山雪荘到着。山形支部会員で滝の小屋の管理人瀬川と支部の若手会員の牧が今日山雪荘まで登ってきた。テレマークスキーの牧は日帰りだ。午後5時ころから雲が切れ、外輪山までくっきりと見える。

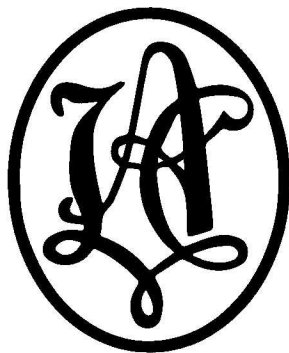
3月13日（月）6時起床。8時山雪荘出発。9時大台野T字分岐着。八幡の温泉施設「ゆりんこ」で入浴。解散。

今回の山行は主催の山形支部会員の参加が少なく、3人の会友を中心とした山行となった。また山雪荘の管理人後藤会員の好意で快適な山小屋生活を楽しむことが出来た。山雪荘は昭和39年（1964年）、12名の山スキー愛好者集団「山雪会」によって建設された山小屋である。その会員であった佐藤慶次郎氏が今年3月18日に他界され、現会員は2名のみとなった。佐藤氏は長く酒田東高等学校山岳部の顧問として多くの岳人を育ててこられた優れた教育者であった。ご冥福を祈ります。

2017 年度 日本山岳会山形支部会員 活動記録

事 務 局

- ※ 4 / 23 庄内日報 梅本 幸巳 (会員No12118)
第50回日本水墨展 (日本水墨画協会主催)
如月会鶴岡代表 梅本 幸仙 (63) 青陵賞第 5 位
- ※ 4 / 30 庄内日報 小野寺 喜一郎 (70) (会員No13384)
旭日章受章
- ※ 10 / 27 山形新聞 高村 真司 (会員No10216) 第59次南極観測越冬設営担当隊員として
11 / 27 「しらせ」にて昭和基地へ向かう。
- ※ 5 / 18 庄内日報 木村喜代志 (会員No7734)
「憧憬の地」自然と人と=ミャンマー・ラオス・インド北部
ネパール・チベット=写真展 5 / 16 ~ / 26 東北公益文科大学 本学部 公益
ホール
- ※ 5 / 20 日本山岳会「山」5月号 (No864) 志田 忠儀 (会員外)
P13図書受入報告 (2017 / 4) 「ラスト・マタギ」—志田忠儀
98歳の生活と意見 KADOKAWA
6 / 20 日本山岳会「山」6月号 (No865) 図書紹介「山人として生きる」
「ラストマタギ」を改題、加筆修正して文庫本2017年3月角川文庫
長年、大井沢で磐梯朝日国立公園管理人として朝日連峰の天狗の小屋、狐穴小
屋龍門小屋を管理しながら、自然保護、特にブナ林の保護に尽力された。
- ※ 5 / 10、21 山形新聞 梅本 幸巳 (会員No12118)
旧いこいの村庄内チューリップ救援活動。NPO法人おうらの里
おおやま再生プロジェクト理事としてボランティア活動。
- ※ 5 / 19 庄内日報 前田 直己 (会員No10217)
故岸 洋子女史 (1934~1992) に縁のあるアップライト
ピアノ1台 酒田市に寄贈。ピアノは岸さんのパネルや年表と共に希望ホール
に常設展示。
- ※ 7 / 6 庄内日報 酒田警察署で講話。テーマ：鳥海山 噴火に備え登山届
- ※ 5 / 25 毎日新聞 菅原 富喜 (会員No11348)
日報連 月例入選作4月度 5位「ブナ、自然への誘い」
6 / 29 毎日新聞 日報連 月例入選作5月度 3位「村祭りの日」
7 / 27 毎日新聞 日報連 月例入選作6月度 7位「母娘の宴」
- ※ 6 / 6 庄内日報 志田 郁夫 (会員No12124)
全酒田写真連盟第44回土門拳杯写真コンテスト 入選



公益社団法人 日本山岳会山形支部

YAMAGATA SECTION OF JAPANESE ALPINE CLUB